

第2章 救いの9つの面 第三 信仰

はじめに

2018年6月から、みやま集会では、救いの3つの段階である「義認・聖化・栄化」を学んでいます。

救いとは、一言で言えば、人が神によって造られた本来の目的とおりに完成されることです。その完成のことを、「栄化」と言います。救いの入り口は「義認」、その入り口から入って完成に向かう途上は「聖化」、そして完成が「栄化」というわけです。

人が救いを受けるかどうかは、その救いの入り口に入るかどうかで決まります。聖書では、救いの入り口に入ることを、「神から義人であると認められる」と表現します。これを短く言ったのが、「義認」です。

では、人はどのようにしてその入り口に入るのでしょうか。また入ったらどうなるのでしょうか。聖書では9つのことを教えています。その9つのこととは、「再生、転回、信仰、悔い改め、告白、赦し、転嫁、子とされること、救われたことの確信」です。

こういうわけで、もし、あなたが伝道をしていて、救いとは何ですかと尋ねられたら、栄化のことを説明します。次に、どのようにして救いを受けるのですかと尋ねられたら、義認と9つのことを語ります。そして、救いを受けた信者はどのような生活をしたらよいのですかと尋ねられたら、聖化のことを答えるとよいのです。

聖化は、信者にとっては、その人の信仰生活そのものです。聖化は、信者になった日からこの地上の生涯を終える日、つまり、肉体の死を迎える日まで続きます。信仰生活においては、神のことばを学び、それを祈りつつ実行していくことがとても大切です。聖書のことばの中で、どの部分が新約時代の信者にとって指針となるのか、そのことも学んでおくことが有益です。

そこで、みやま集会での学びの内容と順序を次のようにしています。全部で5章です。

第1章 栄化

- 救いとは何か。人が神によって造られた本来の目的とおりに完成されることです。

第2章 救いの9つの面

- 人はどのようにして救いを受けるのか（再生、転回、**信仰**、悔い改め、告白）
- 救いを受けたら、どうなるのか（赦し、転嫁、子とされること、救いの確信）

第3章 義認

- 救いの入り口に入る＝神から義人であると認めていただく
- その人の現実はそうではない。義人であるとみなされる。

第4章 聖化

- 信者は「義人と認められた」けれども、その人の内側には「罪の性質＝肉」は残ったままである。罪の性質は、人の内側（霊・たましい・心・思考・意志・良心の6つの要素から成る）に影響を及ぼしている。
- 信者には、信じたときに「新しい性質＝霊」が与えられる。新しい性質を受けることで、人の内側の6つの要素は新しくされ、神を愛し、神のみこころに従うことができるようになる。
- 罪の性質が新しくされることはない。罪の性質は新しくされる対象ではない。これは、人が神によって造られたときから元々あった6つの要素ではないからである。よって、信者の中では、罪の性質と新しい性質とが衝突する。
- 信者は、新しい性質に従って歩むことを選択していく中で、その内側の6つの要素が神の子にふわさしく実際に変えられていく。このプロセスを聖化という。
- 聖化は、罪の性質を改善したり、消滅させることではない。信者が罪の性質から完全に解放されるのは、信者が肉体的に死ぬとき、または変換によって栄光の体を受けて地上から携挙されるときである。

第5章 新約時代の信仰生活における指針とは

本日は、「第2章 救いの9つの面 第三 信仰」です。

救いの9つの面 第三 信仰

信仰について、次のアウトラインで学びます。

1. 信仰の意味
2. 信仰の種類
3. 信仰の形成
4. 信仰の保証
5. 信仰の特徴

1. 信仰の意味

- (1) 日本語で「信仰」というのは、神仏を信じて仰ぐこと、神仏についてのある人の教えや思想に傾倒すること、などを意味するが、聖書の「信仰」や「信じる」とは、誰かが証言する事実を、自分はそれを見ていないが、証言の信ぴょう性を判断して、真実であると確信することを意味する。そして、誰かが証人として証言することを、聖書では「あかしする」、「証言する」という。

- ① ヨハネ3：11～12 あかしを受け入れない（11節）＝信じない（12節）

- ② 使徒たちは、メシアの復活の証人である（ルカ 24：46～48、使 2：32、3：13～15、5：29～32、10：37～43）
 - ③ 旧約聖書は、メシアについてあかしする記録である。よって、使徒たちの証言については、旧約聖書に照らしてその信ぴょう性が吟味された（使 17：11）
 - ④ しかし、メシアの復活について聞いてそれを事実として受け取った人々がすべて信者になったのではない（祭司長たちと民の長老たち、マタイ 28：11～15）
 - ⑤ 現代の教会の中でも、聖書の神を理性的に認めながら、そこで止まっている人は多い。その人自身の生き方に何の変化も起きない。
- (2) メシアは本当に復活したのだという確信に加えて、そのことが自分自身の救いのためにとても重要なことであって、これにかけよう、メシアを信頼して生きていこう、という人が、信者である。
- (3) よって、救いに至る「信仰」は、次の二つの要素をともに持っている
- ① 確信：使徒たちが証言した事実を真実であると確信すること
 - ② 信頼：その確信に基づき、メシアを信頼して生きていこうとすること
2. 信仰の種類（5つ）
- (1) 救いに至る信仰・・・確信と信頼の2つの要素をともに持っている。神の愛に応答し、神をほめたたえずにはいられない。生き方が変わっていく。
- (2) 死んだ信仰（ヤコブ 2：26）
- ① 旧約聖書を信じているがメシアを認めない人（使 26：27～28）
 - ② 聖書の神を理性的に認めながら、そこで止まっている人（ヤコブ 2：19）
 - ③ これらの人は、新しい性質を受けていないので、霊的な応答ができない。その結果、行いに表れてこない。
 - ④ 救いに至る信仰とどこが違うかというと、2つの要素である確信と信頼のうち、二つ目の信頼が欠けている。メシアを自分自身の救いにとってかけがえのないお方であり、このお方に信頼して生きていこうという信頼が欠けている。
- (3) 一時的な信仰（I ヨハネ 2：19）
- ① まわりの家族や友人が信仰を通して変えられていく様子を見て、自分も感情的に同調しただけの人
 - ② このような人は、メシアを本当に信頼したわけではない。その人は再生していない。転回、すなわち罪から神に向きを変える、ということも起きない。
 - ③ このような人は、救いに至る信仰を元々持っていなかった人である。
- (4) 生きる信仰（ガラ 2：20）
- ① 信者が霊的な人生を生きていくための信仰
 - ② この信仰は、救いに至る信仰を持っていることの証拠でもある。恵みにより信仰によって救われた信者は、その後の人生を生きるのもまた、恵みにより

信仰を通して、であることを体験していく（ヘブル 11：1～2）

③ この信仰を通して、信者の人生は神の御力によって守られる（Ⅰペテ 1：5）

(5) 奇跡を信じる信仰

① 「神によって、ある人のために、奇跡がなされるであろう」と信じる信仰

- マタ 8：13
- マタ 17：20
- マルコ 16：17～18
- ヨハ 11：22、40

② この信仰の前提は、神からの具体的な宣言である。まず、神ご自身が、いつ、だれのために、どのような奇跡を行うのか、について具体的に宣言される。それを信じるのが、奇跡を信じる信仰である（出 4：1～9 → 7：8～12）

3. 信仰の形成・・・救いに至る信仰が形成される 3つの段階（ロマ 10：14～17）

- (1) 福音を宣べ伝える人が立てられて、遣わされる。その人の経験的知識が語られ、聞いた人がそれを理解する。
- (2) 聞いた人の中に、福音を真実であるとして同意する人が出る。
- (3) 同意した人の中に、メシアを救い主として信頼する人が出る。この人が、「福音に従った」人であり、「信じた」人である。

4. 信仰の保証・・・福音を宣べ伝える人が依って立つ基盤でもある

- (1) 福音は特定の人に向けられたものではない
 - ① メシアはすべての人のために死なれた（ヨハ 1：29、3：16、Ⅱコリ 5：15、19、Ⅰテモ 2：6）
 - ② 福音はすべての人に向けて語られる。信じるなら、その人は救われる（マタ 11：28、28：19、使 17：30～31）
- (2) メシアは私たちを救うことのできるお方である
 - ① メシアのところに來る者を、メシアは決して捨てない（ヨハネ 6：37）
 - ② この方以外には、だれによっても救いはない（使 4：12）

5. 信仰の特徴

- (1) 再生の 4つの要素のうちのひとつ。人間の側の要件である。救われるためには、人は信仰を持たねばならない。
- (2) 転回の 2つの要素のうちのひとつ。転回とは、意識的に、罪から向きを変えて、神の方に向くこと。神の方に向くのが、信仰である。
- (3) 信仰の源は、次の 4つである
 - ① 信仰は、**神の賜物**である（エペ 2：8、コロ 2：12、Ⅱペテ 1：1）
 - コロ 2：12「神の力を信じる信仰」→直訳「神の働きの信仰」
 - ② この賜物がどのように与えられるかという、真理を確信することによってであり、その確信は**聖霊**によって來る（ヨハ 16：8、Ⅰコリ 2：12～13、Ⅰ

ヨハ 2 : 20)

- ③ 信仰は、同時に、人の内面の活動、すなわち 6 つの要素（霊・たましい・心・思考・意志・良心）の活動によるものである。信仰は、人の側の責任でもある（ロマ 10 : 9、I コリ 2 : 5、コロ 1 : 23、I テモ 1 : 5、6 : 11）
- ④ 人は何を信じるべきか、その内容を与えるのは、神のことばである（ヨハ 5 : 47、使 4 : 4、ロマ 10 : 17）
- (4) 信仰の対象は、神であり、神による啓示全体（旧約聖書と新約聖書）である。
- (5) 信仰の内容、その中心はメシアである（ヨハ 3 : 15、16、18、36、6 : 29、40、47～51、使 10 : 43、ロマ 3 : 22、ガラ 2 : 16）。特に次の 3 つのこと（I コリ 15 : 1～4）
 - ① メシアは、私たちの罪のために死んだ
 - ② メシアは、葬られた
 - ③ メシアは、三日目によみがえった
- (6) 信仰と人の内側の要素との関係
 - ① 思考・・・伝達された経験的知識を理解する、聖書のことばを理解する、福音を理解する
 - ② 心・・・理解した福音を真実であるとは同意し、確信する。
 - ③ 意志・・・メシアを信頼し、福音に従うことを自ら喜んで選択する
- (7) 信仰と感情との関係
 - ① 信仰は、知的理解、同意確信、そして信頼によって成る。感情によって左右されるものではない。
 - ② 信仰は、感情の上に立つものではない。よって、特定の感情と結び付く必要もない（喜び、悲しみなど）。・・・この点は、次回学ぶ「悔い改め」が悲しみの感情を伴うことがあることと対照的です。また、救いの他の面では、「赦し」では平安、「救いの確信」では喜びなどの感情と深い関係があります。